童話『やまなし』（宮澤賢治）研究

――「クラムボン」と「やまなし」の再考から――

兼房高広

一、はじめに

小学校六年生の国語教材『やまなし』と聞いて、何を思い浮かべられるだろうか。

童話『やまなし』の作者と言えば、あの宮澤賢治である。「あの」と付けたのは、あの有名なという意味であるが、小学校の授業者の間では、「あの難しい…」とか、「あの教えにくい…」などと、悪い意味での「あの国語科教材」でもある。

この『やまなし』を最初に教科書に載せたのは、大阪書籍の『中学国語二』（一九六二年度版）であったが、次の改訂では削除している。この教科書への掲載の経緯は、構大樹著『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』（大修館書店　二〇一九年九月）に詳しく書かれているので参照されたい。[注1] 次に教科書に載せられたのは、日本の小学校では、『小学校国語教科書六年』（光村図書一九七一年）昭和四六年版からである。それから五〇年以上に渡って小学六年生の国語教材として、今もなお使われ続けてきている。

しかし、長年実践研究され続けた教材にもかかわらず、多くの授業者に難解で教えづらい教材とされてきたのも事実である。そして、近年では学習指導要領の改訂や読者論の影響もあり、授業づくりの視点が作品の主題を考える作品論的なものから、「鑑賞は読者の数だけ存在する」という考えもあり、作品の描写から学習者が何をどう感じ、どう考えたかといった読者論的な授業に変わってきている。その中で数多くの実践がなされ、優れた研究成果も報告されている。[注2] しかし、それでも『やまなし』が、学習者にとっては分かりにくく、授業者にとっては難解で教えづらい教材であることは今も変わりはない。

そこで、本稿では、難解で教えづらい教材と言われる一番の要因である「クラムボン」や「やまなし」の意味を再考し、童話『やまなし』に込められた作者、宮澤賢治の思いに迫ってみたい。

二、宮澤賢治の童話について

賢治が生前に刊行したものに、一九二四（大正13）年四月に詩集『春と修羅　心象スケッチ』、一二月に童話集『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』がある。また雑誌や新聞にも晩年まで折々に作品発表をしている。『やまなし』も、一九二三（大正12）年四月八日の『岩手毎日新聞』に掲載され、その後手入れされたものである。

『注文の多い料理店』の序には「ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとほり書いた」と率直に述べた後「けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。」と、読者に向けた強い思いを語っている。読者については、この『注文の多い料理店』の「刊行案内」の広告文（一九二四年一一月）の中で賢治自身、

この童話集の一列は實に作者の心象スケッチの一部である。それは少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉に對する一つの文学としての形式をとつてゐる。

と述べ、子供期終わり頃から青年期中頃が対象だとわかる。

この頃の賢治について、萬田務[注3]は「宮澤賢治の童話―その創作動機と成立過程について―」の中で、

更に大正十三年には、彼は「心象スケッチ」と名づける詩集『春と修羅』（四月）、及び童話集『注文の多い料理店』（十二月）を夫々自費出版しているが、これは自費出版してまでも自分の作品を読んでもらいたいという働きかけであり、自己の作品への自信である。

とし、更に、

農学校の生徒であれば、年齢的には児童の枠を越えているが、彼の「新刊案内」の中に「少年少女期の終わり頃からアドレッセンスの中葉に対する一つの文学の形成をとってゐる」とあり、そのアドレッセンスの中葉に相当する年齢である。

と述べて、「農学校の生徒」を「少年少女期の終わり頃からアドレッセンスの中葉」に当てはまっているとみている。

つまり、「蟹の兄弟の話」という登場人物から考えても、萬田の指摘するように、対象は思春期の多感な少年少女を想定していると考えられる。

三、「クラムボン」の正体

『やまなし』の中には、「何のことか」意味の分からない言葉がいくつか存在している。その代表と言えば、「クラムボン」である。光村図書の教科書の脚注には、「作者がつくった言葉。意味はよくわからない。」と書いてある。ただ

し、光村の教科書の指導書の中の「五月」と「十二月」の川底の様子を図式化したものには、五月の「クラムボン」と十二月の「あわ」が同じように書いてあり、教科書会社としては、「クラムボン＝あわ」の立場を取っているように見ることができる。

近年の学習指導では、読者の数だけ解釈があるとする読者論の立場から、学習者の読みを大切にするため、かつてあった「クラムボンとは何か？」で一時間、児童たちが討論するような授業はなくなり、作品を作品としてそのまま味わうような「表現の面白さや効果を問う授業」が主流になっている。

しかし、小学校の授業場面で「クラムボン」に対する色々な意見が出た後で「先生、結局『クラムボン』は何だったんですか？」と聞かれたときに、授業者側に何の答えも持たず、「何でもいいんだよ。」とか、「何だったんでしょうかね。」では、真実を求める学習者には物足りないものが残ってしまうのではないだろうか。そういう意味でも、筆者は『やまなし』の内容理解の上でも、指導上の観点からも、言葉の意味が非常に重要だと考えているので、「クラムボン」を始め、いくつかの言葉に拘って考えていくことにする。

「クラムボン」について、西郷竹彦[注4]は、『増補　宮澤賢治「やまなし」の世界』（黎明書房二〇〇七年）の中で、「あきらかにこの造語にはわざわざかかる造語を用いた作者の明確な意図があるにちがいない。」（同書、六六頁）と述べ、賢治の造語の意味の解明が作品の深い理解につながると考えている。

「クラムボン」については、これまでも多くの研究者が持論を述べてきている。それらを栗原敦は「テクスト評釈『やまなし』」（『国文学　解釈と教材の研究』第二七巻第三号、一九八二年二月号）の「二　語釈」の中で、次のようにまとめている。

①クラムボン―意味不明。十字屋版全集第四巻注では、「クラムポン〔F〕〔E〕⑴鎹（かすがひ）力爪、鉄臍、釣鈎、攀椽、気根。⑵河ぐも（南部地方では水馬）又他の地方では（水すつかし、あめんぼと云ふ）の中脚、後脚をふんばつて谷川の水面を流れにさからつて跳び乍ら上る形相が、かすがひ或は気根に似てゐるので著者はクラムポンと言つたもの。」とし、馬場正男・石井宗吾編『宮沢賢治』（成城国文学会、昭二三・九）も「かにの子供らの考えたあめんぼのことか。」と踏襲。昭和四十三年版全集「語注」（第十二巻付載）では「造語。語源・意味不明。水ぐも（あめんぼ）説などある。エスペラントではない。」また、恩田逸夫は「プランクトンから連想した造語らしい」（「宮沢賢治における幻

燈的と映画的と」『明薬会誌』八一号、昭四六・一）、「小さな川エビを考えているのかもしれない。」（「賢治童話の読み方―『やまなし』を中心に―」『解釈』昭四六・三）と述べ、「宮沢賢治研究会」例会での発言に、カニ crab, Krabbe からの造語説、及びクラムボンが母蟹をさすという意見のあったことを福島《質問教室「『やまなし』には何故母親が出てこないのだろうか？」での討論の報告》（『賢治研究』8、昭四六・八）が記す。新修版全集「語註」（第十三巻付録、執筆・小沢俊郎）では、「"crab"（蟹）から発想した名か。」とする。あるいは、兄弟のふきっこしているあわの擬態・擬音語とも理解できようか。

と、「クラムボン」の「解釈」の変遷をまとめている。

田中成行[注5]は、「『やまなし』のクラムボン考―クラムボンの意味を大正という時代背景と子蟹の成長から考える―」（『賢治学【第7輯】』岩手大学人文社会科学部宮澤賢治いわて学センター編、杜陵高速印刷出版部、二〇二〇年）の中で、栗原の論文に沿って「クラムボン」の解釈の変遷を解説しながらも、

> 子どもの成長発達とその自由詩・自由画等の豊かな表現に関心のある時代だからこそ、読者に「クラムボン」は何だろうと思わせつつ、「ああ幼い蟹の兄弟が「泡」のことを「幼児語」で言ってはしゃいでいるんだなあ」と読むことができたのではなかったか。あるいはそのように作者は読まれることを期待していたのではないか。
>
> 一部のマニアの読者になぞ解きをさせる小説ではなく、岩手県の地方新聞に掲載された童話であることを確認したい。

と述べ、自由な解釈のままで置いておくことや「なぞ解き」ゲームのようになってはならないと考えている。これに続けて、田中は「**子蟹の成長と人間の成長発達段階とを重ねている**」（同右、六四頁、太字は著者。）ことに着目した人物の論文として、吉本隆明と中村文昭と木村百代の三氏のものを紹介した上で、「幼児語」研究からの解釈を踏まえて「クラムボン」に対する考えを次のように述べ、三氏に賛同する立場を示している。

> では五月の、蟹の兄弟がまだ大きくなる前の、「お魚」と幼児語を使う幼かった頃に「クラムボン」と呼んでいたものはなにか。
>
> それ一二月（ママ）には「僕の泡」と呼んでいる「泡」であると考えたいのである。人間の幼い子が「車」を

「ブーブー」と言うように、幼児語で「泡」を「クラムボン」と呼んだと考えたいのである。

幼い蟹の兄弟も、自分達で感じた直感で「クラムボン」と呼んでいた「泡」を、脱皮して身体が大きく成長する中で、一二月にはお父さん達大人から、それは「泡」だと教えられていたのであろう。

しかし、この「蟹の子供ら」の「成長」を、そのまま良いこととすることに対して、西郷だけは、

逆にいうならば、五月の場面における兄弟の姿の変貌したものが十一月の場面の〈泡くらべ〉の兄弟の姿にあるともいえるのだ。十一月の場面の冒頭に〈蟹の子供らはもうよほど大きくなり〉とあるが、これは身体だけではない。その煩悩も〈大きくなり〉とみるべきであろう。

とし、「成長とは『業（煩悩によって生じるもの）』を背負うこと」であり、必ずしも良いこととは言えないと、独自の解釈を示している。そして、西郷は「クラムボン」について、カニの「幼児語」としながらも、次のように結論づけている。

しからば、クラムボンとは何ぞや。結論を言おう。クラムボンとは、仮名である。〈光の網〉〈水の泡〉が仮名であると同じく、〈クラムボン〉ということばも、仮名としてとらえたとき、それは「やまなし」の世界観にかかわってくるはずである。

〈光の網〉や〈水の泡〉などのことばとクラムボンということばが同じ仮名であるとしても、前者が日本語であるとすれば後者がカニ語である、ということがちがうだけである。

【中略】ここで何より重要なことはクラムボンということばと対応する何らかの実体があると思ってはならないということなのだ。

ここで、西郷は「クラムボン」を幼い蟹の兄弟が発する「カニ語」とするも、「何より重要なことはクラムボンということばと対応する何らかの実体があると思ってはならない」と、「クラムボン」の正体の究明を否定している。更に、「クラムボン」について、

蟹の子供らは、〈かぷかぷわらう〉〈跳てわらう〉という現象を仮に名づけて〈クラムボン〉と呼んでいるのである。蟹の子供らは（また読者も）ある種の生物と見ているようだが、はたしてそうであるか否か、確

かめる術はない。

〈クラムボン〉とは、そのような意味で用いられている仮名なのだ。〈イサド〉も同様である。したがって、読者がそれらの仮名のむこうにあるいは裏に何らかの実体があると思うのは錯誤である。

と述べ、「クラムボン」は「光の網」や「水の泡」が、動いたり、揺らいだり、弾けたりする「現象」に対して、幼い蟹の兄弟が「カニ語」で名付けて使った「幼児語」としている。そして、再度、多くの研究者や読者が「クラムボン」の実体を探していることを「錯誤」と言ってのけている。この「現象」としての捉えによる「クラムボン」の同様の解釈は、秦野一宏[注7]も「宮沢賢治と言葉(2)―「やまなし」考」の中で、次のように述べている。

兄弟蟹は「天井」を流れゆく「泡」そのものをクラムボンと呼んでいるわけではない。クラムボンとは泡という概念そのものではなく、今、垂直的に動いている泡の状態を生きものに見立てたものだろう。

クラムボンという言葉の響きが泡の動きから作られた架空の生きものにぴたりと当てはまる。

秦野は、「クラムボン」とは、「垂直的に動いている泡の状態を生きものに見立てたもの」であり、「クラムボンという言葉の響きが泡の動きから作られた架空の生きもの」と西郷と同じように、現象に名付けた言葉としている。

では、これらの諸説を踏まえながら、「クラムボン」の意味をもう一度考えるために、再度『やまなし』を見ていくことにする。「クラムボン」が最初に登場してくる場面での「蟹の子供ら」の会話は、演劇の台本風にト書きのような地の文と蟹の兄弟の台詞で、次のように書かれている。実際、東京から帰郷した賢治は、自ら台本を書き、演劇を行っていることを考えると、共通性が感じられる。

上の方や横の方は、青くくらく鋼のやうに見えます。そのなめらかな天井を、つぶつぶ暗い泡が流れて行きます。

『クラムボンはわらつてゐたよ。』

『クラムボンはかぷ〳〵わらつたよ。』

『それならなぜクラムボンはわらつたの。』

『知らない。』

つぶ〳〵泡が流れて行きます。蟹の子供らもぽつ〳〵とつゞけて五六粒泡を吐きました。それはゆれながら水銀のやうに光つて斜めに上の方へのぼつて行きました。

つうと銀のいろの腹をひるがへして、一疋の魚が頭

の上を過ぎて行きました。
『クラムボンは死んだよ。』
『クラムボンは殺されたよ。』
『クラムボンは死んでしまつたよ……。』
『殺されたよ。』
『それならなぜ殺された。』兄さんの蟹は、その右側の四本の脚の中の二本を、弟の平べつたい頭にのせながら云いひました。
『わからない。』

まず、最初のト書きのような語りの部分で「つぶつぶ暗い泡が流れていきます。」と述べた後、それを受けて「蟹の子供ら」の台詞が続き、「クラムボンはわらつてゐたよ。」と完了形で一定が言うと、対象が何かをしっかりと理解した上で、もう一定が「クラムボンはかぷくわらつたよ。」と返している。そしてその後も、「つぶつぶ泡が流れて行きます。蟹の子供らもぽつくくとつゞけて五六粒泡を吐きました。」と、語りの部分では書かれている。そして、これと同じことは、「十二月」の月夜の晩にも、「蟹の子供ら」の無邪気な「泡くらべ」として描かれている。

つまり、語りの部分で「泡」と言ったものをそれを受けた台詞の部分で「蟹の子供ら」が「クラムボン」と言っており、作者は明確に区別をしていることがわかる。もし、「蟹の子供ら」の台詞の「クラムボン」を「泡」でないとすると、当然、語りの部分で「クラムボン」に相当するものが出てこないと、ここの場面の整合性がつかなくなってしまう。そもそもこの幼い「蟹の子供ら」はこの場面で、口から「泡」を吐いて、水中に飛ばして遊んでいるのである。その彼らが目で追うものは、当然、彼らの吐いた「泡」であるはずである。それゆえ、語りの部分の「泡」のことを「蟹の子供ら」が「クラムボン」と呼んでいると解釈するのは、とても自然な読みではないだろうか。

論者自身も当初は、「クラムボンはわらつたよ。」、「クラムボンはかぷくわらつたよ。」、「クラムボンは死んだよ。」、「クラムボンは殺されたよ。」という生き物ならではの表現から「命あるのもの」、すなわち「生き物」と考えていた。それも、発音も似た「プランクトン」のような水中にたくさんいる微小な水生生物だと考えていた。そして、それを「魚」が食べ、その「魚」を「かわせみ」が食うといった「弱肉強食」、「食物連鎖」を念頭に置いていた。そして、その「食物連鎖」の頂天にいるのが「かわせみ」で、底辺を支える最弱の存在が「クラムボン」と考えていた。

しかし、この文脈の流れと「十二月」に「クラムボン」が出てこないことを考えていく中で、語りの部分で言っている「泡」のことを幼い「蟹の子供ら」が、舞台劇の台詞のように流れの中で、「クラムボン」と呼んでいると考える

ようになった次第である。そうすると、なぜ「蟹の子供ら」は、「泡」のことを「クラムボン」と呼び、「わらつた」「死んだ」「殺された」と生き物のように言うのかという当然の疑問が起こってくる。

そこで、従来の解釈をもう一度辿ってみると、先の三氏や西郷も「『クラムボン』は、蟹の幼児語」と考えている。その説明によると、「『クラムボン』とは、賢治の作った造語で、蟹の幼児語。賢治は他の作品の中でも造語を作っているが、『クラムボン』もその一つ。」ということであった。つまり、「クラムボン」は、「蟹の子供ら」が自分たちの吐いた「泡」や自然に流れている「泡」を自分たちの世界の言葉で言った幼児語であることであった。ただし、「蟹の子供ら」の「幼児語」は、一般的に言われている「わんわん」は犬、「ブーブー」は車のような誰もが認識できるような実体のあるものを、オノマトペなどを使った畳語で表し、大人が教えた幼児語ではない。幼い「蟹の子供ら」がその体内から放出した一般的には「泡」と呼ばれる不思議な生き物のようなものに対して、「クラムボン」と名付けて話しているということである。つまり、言葉の理解が不十分な幼児の認識する世界では、当然、見えているものは大人と同じでも、発せられる言葉は大人とは異なる。場合によっては、見えている世界も、認識している言葉や世界観、精神性が異なるため、同じように見えていない場合もあるのではないか。

しかし、ここで二つの疑問が生じてくる。一つ目は、「なぜ、生き物でもない『泡』である『クラムボン』が、笑ったり、死んだり、殺されたりするのか。」という疑問である。そして、二つ目は、「なぜ、五月にたくさん出て来る『クラムボン』が十二月になると一つも登場しないのか。」という疑問である。

一つ目の解答であるが、作者賢治自身が十二月の冒頭の「蟹の子供ら」の説明で、「蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすつかり変わりました。」と、明言し、場面設定をしていることがとても重要だと言える。つまり、「五月」の「蟹の子供ら」は、とても幼く「命」や「死」の意味もまだ分からない、物事の分別のつかない幼い子どもたちであり、反対に「十二月」の「蟹の子供ら」は大きく成長し、それに伴って川底の景色もすっかり変わったと述べているのである。

実際に、「五月」の「蟹の子供ら」は、「クラムボン」が「死んだ」のか、「殺された」のか、また、なぜ「わらつた」のか、よく分かっていない。ここからは、想像的解答になるが、「五月」の「蟹の子供ら」は余りにも幼くて物事の分別や物事の道理も分かっていないため、お父さん蟹や人間が「泡」と言っているものを、自分たちで「クラムボン」と呼び、その「クラムボン」である「泡」が揺れたり、大

きく動いたりする様子を「クラムボンはわらつたよ。」とか、「クラムボンははねてわらつたよ。」と言って、自分達の世界で遊んでいたのではないだろうか。つまり、これは、意識して言葉で遊んでいたのではなく、幼い「蟹の子供ら」に見えた世界の中で普通に過ごした結果なのである。そして、「泡」が勝手に割れたり、「魚」に壊されたりすると、「クラムボンは死んだ」とか、「クラムボンは魚に殺された」と、「はねてわらつたよ」なども含めて、自分達なりに解釈して自分達の言葉で表現していたのではないだろうか。

しかし、作者である賢治は、「幼いこと」を「愚かなこと」と捉えるのではなく、「きれいな心や目を持った素直で純粋な存在」、もっと言えば、「神聖なもの」、「尊いもの」として捉えているのである。だから、この場面は明るく描かれている。こうした傾向は他の賢治作品、『風の又三郎』や『どんぐりと山猫』のように現実世界で子供だけが経験したり、招待されたりするところにも、見られるのではないだろうか。

これに対して、「よほど大きくな」った「十二月」の「蟹の子供ら」は、成長して父親の蟹と同じ言葉で普通に話すようになっている。そのため、「泡くらべ」をしているときの会話の中に「泡」が出て来ても、「蟹の子供ら」の「幼児語」であった「クラムボン」は使わずに、「泡」と言っている。そのため、「クラムボン」の認識のない「お父さんの蟹」との会話や「十二月」の成長した「蟹の子供ら」の言い争いの中には「クラムボン」は出てこないのである。

また、「クラムボン」が幼児語である証明としてもう一つ。「蟹の子供ら」の会話で「それならなぜクラムボンはわらったの。」「知らない。」、「それならなぜ殺された。」「わからない。」、「お魚はなぜああ行ったり来たりするの。」「何か悪いことをしてるんだよ」「とってるんだよ。」、「とってるの。」「うん。」、という一連の会話がある。しかし、この会話、漠然とした内容で何も具体的な話はしてないが、なぜか通じ合っている。こうした所にも、大人には理解しがたい世界にいる幼児の精神世界が見て取れるであろう。

そして、「蟹の子供ら」が「もうよほど大きくなった」「十二月」には、「蟹の子供ら」は「五月」のときと同じように泡を吐いているが、ここではしっかりと意識を持って「泡くらべ」をして競い合っている。しかし、その中で「クラムボン」という言葉は一つも出てこない。つまり、成長して大人に近くなった「蟹の子供ら」の認識は、「泡」は「泡」であって、「クラムボン」ではない。これは「蟹の子供ら」が「幼児語」である「クラムボン」を子供じみた言葉で使わなかったのではなく、二疋が成長し「クラムボン」の認識がなくなり、使えなくなったのではないか。または、二疋が成長したことにより、幼い時とはその精神世界が変わってしまい、今まで見えていたものが見えなくなり、彼

らの世界認識そのものが変わってしまったからではないだろうか。

もし仮に、「クラムボン」が水中の生き物だとすると、なぜ、「十二月」の場面に一つも出てこないのであろうか。生き物の幼生としてのプランクトンはいないかもしれないが、それ以外の微生物が多少なりともいるはずで、幾ら活性が鈍っているにしても、ゼロということは絶対にないから、余りにも不自然である。そこで、「クラムボン」を「泡」だとすると、「クラムボン」とは呼ばれてはいないが「泡」として「五月」と同じように登場している。こう考えると、とても自然で整合性のある展開といえるのである。

また、生き物に対するような発言であるが、純粋な心を持った幼い「蟹の子供ら」には、「泡」が生き物のように見えていたのではないだろうか。また、「泡」だけでなく、この「日光の黄金」が降り注ぐ、「光のあみ」に包まれた川の中の光景は、五月の暖かい日差しに包まれた「命」の世界のように見え、あらゆるものに「生」を感じていたのではないだろうか。このように考えていくと、自分たちの口から出すことのできる「泡」も、自然界の存在する「泡」も、幼い「蟹の子供ら」には、大人の蟹や人間には分からない「命を宿した『クラムボン』」だったのである。そして、「日光の黄金」が降り注ぐ「光のあみ」に包まれた美しく温かい世界で「クラムボン」は躍動して見えたのではないだろうか。こうした子供にしか見えない世界、大人には分からない精神世界を描いた作品は少なくない。そして、美しい純粋な精神世界にいる幼い「蟹の子供ら」[注5]には、五月の日の光に照らされながらキラキラしながら上がっていく自分達の吐いた泡が、大いに興味をそそる不思議な生き物に見えたのではないか。また、繰り返しになるが、十二月にはいないが五月にはいるであろう「アメンボ」などの生き物だとすると、仲間が「魚」に食べられた後に何事もなかったかのように、また、集まってくるであろうか。本当に命や意識がある生き物ならば、逃げていってしまうか、もう少し離れた別の場所に集まるであろう。少なくとも蟹の兄弟の会話も、「クラムボンは怒つているよ」とか、「泣いているよ」とかになるのではないだろうか。この場面では、表情や感情のない無機質なもののように描かれている。

二つ目の解答であるが、それは、「蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすつかり変」ったからである。先述したように、「クラムボン」は「泡」の「幼児語」であり、童話『やまなし』全体が「蟹の子供ら」の目を通して見えたものが語られているので、すっかり成長した「蟹の子供ら」に見えなくなった「クラムボン」は、「十二月」には存在し得ないのである。

また、変わったものは「蟹の子供ら」だけでなく、川の底の様子も春から秋へと大きく変わっている。これは、月

日の流れとそれに伴う自然の変化を表していると思われる。

西郷竹彦以外は、これで「クラムボン」という言葉が「十二月」の場面で出てこない証明としてきたが、西郷は「前掲載書」である『増補　宮澤賢治「やまなし」の世界』の中で、「十二月」の「蟹の子供ら」の「泡くらべ」の様子を次のようにも述べている。

幼い蟹の子供らの、まったく他愛もない、ほほ笑ましい情景である。

これまで多くの研究者が、蟹の子供らの会話に注意を向けていないのも、このような他愛ない情景という捉え方があるからであろう。〈中略〉

しかし、ここでよく知られた賢治の童話「どんぐりと山猫」の次の場面を想起していただきたい。

ここで西郷は、自分本位で俗物な大差のないもの同士の「どんくり」が「どっちが立派か、誰が一番偉いか」と言い争いをする様子を取り上げ、まさに「どんぐりの背くらべ」と言い放ち、それと同じことをこの「蟹の子供ら」は言っていると指摘している。西郷は最後に、

「どんぐりと山猫」のどんぐりどもも、「やまなし」の蟹の子供らも、いずれも〈十重禁戒〉の〈不自讃毀他戒〉に相当する〈悪〉をおかしているといえよう。

と言い、仏教思想から「蟹の子供ら」が成長と共に、世俗と欲得に染まり、「煩悩」から生じる「業」を背負った存在となってしまったと捉え、「クラムボン」は蟹の幼児語とする見解のまとめとしている。

また、西郷はもう一つの意味の分からない賢治の造語「イサド」について、「かにの兄弟」の心を満足させるような「楽しい所」と考えている。教科書『国語六』（二〇二〇年、光村図書）の脚注には、「イサド」について、「作者が想像して作った町の名前。」とある。論者も、「イサド」に関しては、教科書の脚注と西郷の考えを合わせて、単なる「町の名前」ではなく、一歩深めて、定期的に「市」が開かれる「町の名前」、または、今でいう所のイベント広場のような「場所の名前」だと考えている。昔の市場は、物の売り買いだけでなく、見世物などの娯楽施設のような所で、成長した「蟹の子供ら」の好奇心を刺激する、どうしても行きたい場所であったと考える。

ただし、論者は西郷のように、幼い「蟹の子供ら」の成長を、「煩悩への堕落」と捉えるのではなく、『やまなし』を「アドレッセンス中葉」の読者を対象とした童話だと捉え、賢治自身が、「蟹の子供ら」の成長を素直に喜んでいると見るべきだと考えている。そう考えるならば、幼児期の

他者から守られた「内の世界」から、自立した大人の「外の世界」への門出のようなもの、と言えるかもしれない。

以上のことが、「クラムボン」が十二月の場面にいないもう一つの理由になっていると論者は考えている。ただし、従来からある成長して「幼児語」である「クラムボン」を使わなくなったとするのではなく、成長したことで、幼い頃に見えた精神世界のものが認識できなくなって「幼児語」である「クラムボン」が使えなくなったというように考えており、若干の違いがある。

つまり、「クラムボン」は幼い「蟹の子供ら」にしか理解し得なかった精神世界の言葉だったために、成長した「蟹の子供ら」は「十二月」の場面では「クラムボン」の認識がなくなり、大人のお父さん蟹と同じ「泡」という言葉を使って、普通に会話しているのである。また、そのことは成長と共に「蟹の子供ら」が純粋な心を失い、川の中の「黄金のあみ」や「月の光」に包まれた「クラムボン」を始めとする命のきらめきが見えなくなったということを意味しており、一見残念なことのようにも思われる。しかし、見方を変えれば、これは新しい大人の世界の始まりを意味し、新たなる門出の予兆でもある。これこそが、賢治が書いた「アドレッセンス中葉」の読者への童話たる所以ではないだろうか。

四、「やまなし」の本当の意味

では、作品の題名にもなった「やまなし」の意味について考えることで、童話『やまなし』の本質を明らかにしていくことにする。

まず、「十二月」の幻灯の場面の最後にしか出てこない「やまなし」が、なぜ題名なのか、という誰もが懐く根本的な疑問から考えてみよう。

「やまなし」は、「そのとき、トブン。」と、突然、天井から落ちてきている。今までの経験から、「蟹の子供ら」も読み手である子どもたちも「かわせみ」を予想するが、それに反して、今まで一度も登場したことのない「やまなし」の突然の登場となっている。

ここで、「突然の登場」と言ったが、「やまなし」はここで初めて存在するのではない。なぜなら、「やまなし」は、「かわせみ」と違って、どこからか突然、飛んで来るものではないからである。元々「やまなし」は、ずっと、蟹の親子が住んでいる川の天井の上で、川の住人たちとは関係なしに、静かに存在しており、ただ、この幻灯の画角から外れた所に存在して映っていなかっただけである。結果的に、話の中では最後にしか出てこない「やまなし」であるが、「蟹の子供ら」が住んでいる川底の上にいつも存在し、「五月」の幻灯の場面でも、「十二月」の幻灯の場面でも、ただ

作品の文字の中に描かれていないだけで、ずっと存在していたのである。そして、最後になって「トブン」と突然、川底に登場して来たのである。

これまでの『やまなし』の解釈は、五月からの「やまなし」の存在についてあまり言及しないで、「五月」の場面を「生存競争」または「食物連鎖」と言える「生の営み」を受けて、『やまなし』の主題を「生と死の対比」や「自己犠牲」としてきたものが多かったように思っている。また、「やまなし」を自然の恵みや秋の豊穣の象徴として捉える見方もあった。

しかし、「魚」や「かわせみ」など、多くの生き物が他者を捕食しなければ、生き長らえることができない。それが、動物として生まれてきたものの宿命である。田中瑩一[注8]は、「宮澤賢治の『花鳥童話』諸作品に見られる主題の構造と展開」（島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第十五巻）の中で、『蜘蛛となめくぢと狸』をテクストにして、

> たしかに生存競争の過程にみられる慢心、欺瞞、殺戮の現象―基本的には生きものが自己の生命を保つために他の生命を糧とせざるを得ぬという事実（以下本稿ではこの事実を「生存罪」と呼ぶことにする）との格闘が賢治の生涯にわたる重要な創作上のモチーフの一つであったことは明かであり、この作品にも、必要以上に他の生命を奪う行為（特に「蜘蛛の章」）や、悪辣に他をあざむいて生命を奪う行為（特に「まねくぢ」と「狸」の章）が素材としてとりあげられている。

と述べ、生き物の自らの命を長らえるための捕食の営みを「生存罪」と呼び、宮澤賢治の初期の童話作品群は、この「生存罪とその超克」をテーマに書かれたとしている。そして、この「生存罪」を強く意識し、悲しんでいるのが『よだかの星』の「よだか」である。作中「よだか」は自分が生き長らえるために、何の罪や落ち度のない「羽虫」を食べることに罪悪感を持ち、「何も食べない」でいようと考える場面がある。そう考えている最中に、口の中に入ってきた「甲虫」を食べ悲しんでいる姿が描かれている。そして、「やまなし」を「生存罪を超克した存在」とし、「五月」を「生存罪の世界」と位置づけ、「十二月」を「生存罪を超克した世界」と述べている。

論者も童話『やまなし』を「蟹の親子を始めとする川の中で繰り広げられる『生の営み』と、それは無関係に存在し、静かに生を全うする『やまなし』を描いた作品」とし、作品の主題を「理想の生」と考えていた。なぜなら、「やまなし」の実は熟して落ちてきたが、「やまなし」の木（本体）は、山の上で川の辺に存在し、今なお生きており、「やまなし」の木自身には何の変化がないからである。そして、

最後の場面で、その実を木から川へ落としているが、これは従来の解釈の中にあった「自己犠牲」ではなく、生物学的に見れば、「種の保存」のための行動であり、「自己の保全」のための営みである。そもそも「犠牲」というのは、「何らかの意志で他者を助けるために、その身を犠牲にする行為」のことを指すものである。そして、それが「自分自身の意志」によるものであれば「自己犠牲」であるし、「自分の意志ではない他者」によるものであれば、そのまま「犠牲」というのである。

これについて、田中瑩一は、『なめとこ山の熊』と『やまなし』を対比しながら、

「待て待て、もう二日ばかり待つとね、こいつは下へ沈んで来る、」と「父蟹」が言う。この一節は「なめとこ山の熊」において〝し残した仕事があるから二年待ってくれ、二年待ったらおまへの家の前で死んでゐてやる、毛皮も胃袋もやるから〟と約束する熊の姿につながって行くものである。そうして「やまなし」が沈んで来たら食べるかというとまだ食べない。

「それからひとりでにおいしいお酒ができるから、さあ、もう帰つて寝やう、おいで。」

と言う。「ひとりでにおいしいお酒ができる」まで待つという、即ち生命を貰う相手が完全に充足し、完全に燃焼するまで待って相手が満ち足りてその生命をこちらに渡してくれるのを待って、しかるのちその生を貰う、こういう関係になったとき「生存罪」は超克されるのである。

と、「生存罪」の「超克」には、生を貰う相手の完全燃焼による充足と同意が不可欠としている。確かに『なめとこ山の熊』においては、命を貰う相手の充足と同意を得ているが、「やまなし」の場合も同じと言えるのであろうか。意思を持った動物と意識さえない植物の木の実では、少し異なると思う。ただ、賢治の童話の中には、『なめとこ山の熊』や『気のいい火山弾』などのように、話ができる動物や植物、それだけでなく生き物ではない川や石などの自然物でさえ、意思を持って話すことができるものも出てくる。『気のいい火山弾』では、登場してくる人間はそのことには一切気付いていない。しかし、童話『やまなし』の無自覚な「やまなし」では、受け手側の認識、心の有り様によって捉え方が違ってくると言わざるを得ない。つまり、与えるものと与えられるものという、双方向のベクトル、相互関係は存在せず、蟹の親子から見れば、「喜び」や「幸い」をもたらす有難い存在で、「やまなし」から見れば、自然な営みでしかない。このことから考えて、「やまなし」の行為、またはその現象は、日常の「生の営み」、通常ことなのであり、

結果的に「やまなし」の落とした実が、蟹の親子を始めとする「他者」に「喜び」や「幸い」をもたらしたに過ぎず、恣意的なものではない。ただ、来年も再来年も「やまなし」の木が枯れない限り、花を咲かせ、実を付けることを繰り返し、蟹の親子を始め、周りの生き物に喜びを与え、たとえ枯れたとしても、また別の「やまなし」が他者に「喜び」や「幸い」を与え続けるのである。

ここで重要になることは、「生の営み」の違いである。この作品の中に登場してくる「かわせみ」も「やまなし」も突然、天井から落ちてきて、「蟹の子供ら」を驚かせるところは同じである。しかし、その後に「恐怖」を残す「かわせみ」と、「喜び」をもたらす「やまなし」は、全く違う存在として描かれている。そして、その存在のどちらを作者宮澤賢治が重要視したかは、題名を見れば一目瞭然、「やまなし」である。

では、この違いは、どこからやって来るのだろうか。まず、「かわせみ」は、自らが生きながらえるために食料となる「魚」を捕食し、その光景を見た幼い「蟹の子供ら」に恐怖をもたらしている。一方、「やまなし」は、五月頃に誰に知られることもなく花を咲かせ、やがて、実を付け、十二月に川へ実を落としている。そして、その落ちた実もやがて「お酒」になり、蟹の親子を含めた周りの者に「喜び」や「幸い」をもたらしている。つまり、「やまなし」は、その花を咲かせ、結実し、実を落とすまでの中で、自らが生き長らえるために他者を犠牲にすることもなく、自分だけの力で生を全うし続けている。つまり、「やまなし」の「生」は、他者に一切頼ることのなく自分自身の力だけで「生」を全うしているのである。まさに、「自己で完結している生」（自己完結の生）といえよう。この生き方は、他の登場人物である「魚」や「かわせみ」のように、他者を犠牲にすることで自らが生き長らえる「業」を背負う生き方とは、全く違う生き方なのである。これを田中瑩一は「生存罪」を負うた生き方と捉えている。

一方、「かわせみ」は、「幸い」や「喜び」をもたらすどころか、「魚」の命を奪い、「蟹の子供ら」に恐怖を与えている。しかし、こうした生き方は、この世に生を受けた者の多くがする生き方で、「かわせみ」のように、他者を犠牲にして自らの生を長らえる「自分だけでは完結できない生」を営んでいる。

このことから、童話『やまなし』は、他の賢治作品に見られるような、みんなの幸せのために自分の命を差し出す「自己犠牲」ではなく、「やまなし」自身だけで「自己完結する生」、「至高の生」の有り様を示したものであったのではないだろうか。そもそも、「やまなし」に意識や自我といったものがないのだから、「自己犠牲」自体が成立していない。つまり、「やまなし」は、「クラムボン」や「魚」の

ように自己を犠牲にしたり、「魚」や「かわせみ」のように他者を犠牲にしたりすることもなく、自分自身の力だけで生を営み、自己の保全のために行った無自覚な行為が、結果的に周りの者に「喜び」や「幸い」を結果的にもたらしているのである。そして、無自覚だからこそ、自然体であり、その無理のない生の営みこそ、賢治の求めていた理想の生き方だったのではないだろうか。

この賢治の理想とする生き方から見た「無意識」「無自覚」の行為について、賢治が花巻農学校在職時の一九二六年一月から三月にかけて、岩手県が農学校を利用して開設した岩手国民高等学校（常設の学校ではなく、農村指導者を養成するための集合講座）の講師を務めた折に行った講義用に作成した文章とされる『農民芸術概論綱要』の「農民芸術の創作」の中で、次のように述べている。

……いかに着手しいかに進んで行ったらいいか……

世界に対する大なる希願をまづ起せ
強く正しく生活せよ　苦難を避けず直進せよ
感受の後に模倣理想化冷く鋭き解析と熱あり力ある
綜合と
諸作無意識中に潜入するほど美的の深と創造力は
〔加〕はる
機により興会し胚胎すれば製作心象中にあり
練意了って表現し　定案成れば完成せらる
無意識〔部〕から溢れるものでなければ多く無力か
詐偽である

ここで賢治は、受講者である農業青年達に対し、「無意識〔部〕から溢れるものでなければ多く無力か詐偽である」と、作為的な行為を否定している。この点から見ても、「やまなし」の不作為の行為に込められた賢治の思いが伝わってくるのではないだろうか。

だから、最後に「やまなし」のこのような生の営み、存在の大きさや尊さを強調するように、「波はいよいよ青じろい焔をゆらゆらとあげました、それは又金剛石の粉をはいてゐるやうでした。」と締めくくっている。この表現にも賢治の「やまなし」の生き方や存在に対する特別な思い、聖なものに対する崇拝や畏敬の念が現れていると考える。

以上のことから、「やまなし」の「自己完結する生」こそが、賢治が探し求めていた理想とする生き方に近いものであることがわかった。そして、その「やまなし」が題名になっている童話『やまなし』が、「生の在り方」や「生の営み」をモチーフに描かれていることがわかった。

五、「アドレッセンス中葉」に捧ぐ『やまなし』

では、最後に、賢治が読んでもらおうとした読者に対する賢治の思いから、『やまなし』をもう一度検証してみることにする。序章で述べたように賢治は、『イーハトヴ童話注文の多い料理店』の広告文の中で、「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉に對する一つの文学」と述べ、読者を子供期を終えるころから思春期を経た青年期中頃の人物としている。このことは、賢治が稗貫郡立稗貫農学校（翌年に岩手県立花巻農学校へ改称）で教師として生徒に教えようとしたこと、教師を辞めて「本当の百姓」になって一緒に貧しい農家を救おうとしたこと、そして羅須地人協会を設立し、農家の若者たちを集めて科学的農業や娯楽などを教えていたことを考えると、この対象設定に賢治の思いや願いが感じられる。

人は子供時代から思春期・青年期を経て大人へと成長するが、その中で自分の夢や希望に向かって突き進もうとするときに、多少の差はあるものの誰もが人生の荒波に揉まれたり、厚い壁に遮られたりして、悩んだり苦しんだりするはずである。童話集『注文の多い料理店』の掲載童話ではないが、同時期に成立した『やまなし』の「蟹の子供ら」も、「五月」幼少期の純粋で素直な心で「クラムボン」を語り、生存競争をする「魚」や「かわせみ」に対して、単純に恐怖心を懐くだけであったが、成長した「十二月」では、大人の言葉を使い、希望に満ちた明日に胸を弾ませている。しかし、大人になると見えてくる現実世界では、子供の頃だと恐怖心を懐くだけで後は父親に守ってもらっていたが、助けてくれるものもなく、自分の力だけで乗り越えていかなければならない。「五月」の魚やかわせみも、乗り越えていかなければならない障害であり、試練なのである。

こうして「十二月」の月の光の下の「蟹の子供ら」を見るとき、「蟹の子供らは、あんまり月が明るく水がきれいなので睡むらないで外に出て、しばらくだまつて泡をはいて天井の方を見てゐました。」（『【新】校本宮澤賢治全集第十二巻本編』一二八頁　筑摩書房）という様子も、「イサド」への出発を心待ちにして眠れずにいる蟹の兄弟が、力比べをしているようにも思えてくる。この前夜こそ、見方を変えると、閉ざされた幼児期の世界から外界である大人の世界への旅立ちの前夜であり、「イサドへの父親の誘い」は、大人の世界への誘いであるといえるかもしれない。そして、そこへの「やまなし」の突然の登場である。「やまなし」を知らない「蟹の子供ら」には、「かわせみ」（恐怖）に思えたが、父親の助言で「やまなし」（喜び・至福）と知る。そして、「三疋」で追いかけていくのであるが、これを立派に成長し、大人の社会へ大きな一歩を進めようとする「蟹の子供ら」に対する「天からの贈り物」と考えられない

だろうか。そして、「月明かりの水の中」を、「そのいいにおいでいっぱい」にした「やまなし」が、「二日」経てば「お酒」になるというのだから、大人への成長を祝う「祝い酒」か、「餞のお酒」が、天から送られてきたと考えることもできよう。

こう考えると、この「蟹の子供ら」と同じような「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉」の読者に対して、「五月」の幼い「蟹の子供ら」から見た世界と、それとは全く異なる「十二月」の「蟹の子供ら」を取り巻く世界、そして、彼らを優しく導く蟹の父親を示すことで、子供期を終え、思春期を経て大人社会に船出しようとする者や大人社会の障害で試練を味わっている者達への作者賢治からの贈り物（指針を示したもの）が、『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』であり、『やまなし』であったと思えてならない。

六、おわりに

本稿では、意味の分からない造語の代表である「クラムボン」や「やまなし」の本質的な意味の探究を端緒に、童話『やまなし』に込められた作者、宮澤賢治の思いや願いを紐解こうと試みた。その結果、「やまなし」自体の生き方が、自分の意志で我が身を犠牲にし、他者を助ける「自己犠牲」の象徴ではなく、自然体で自己の生の営みを行うものとして存在し、その中で他者を傷つけたり、命を奪ったりすることなく、花を付け実を落とし、その実もただ朽ち果てるのではなく、川に落ちた後も「お酒」となって、最後の最後まで他者に「喜び」や「幸い」をもたらす、「自己完結する生」と言えることが分かった。そして、その自己完結し、他者に喜びや幸いをもたらす生の営みこそ、宮澤賢治が理想とした生き方だったのである。また、「やまなし」は、立派に成長し大人社会に出向いていく蟹の子供ら（少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉）に対する「天からの贈り物」であり、「祝い酒」「餞のお酒」でもあったようにも思われる。そのことを宮澤賢治は、川の底の世界を映し出した二つの幻灯として、私たちに見せていたのである。

なお、宮澤賢治の作品や資料の引用は、『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）に拠った。ただし、ルビは割愛している。

注1　大修館書店二〇一九。

注2　横山信幸「教材『やまなし』（宮沢賢治）の意義を問う」（『日本文学』65巻1号二〇一六）には、これまでの教材研究や授業実践の歩みがまとめられている。その中で、授業のメインではないものの「クラムボン」の解釈は多く述べられているが、「やまなしの正体」と共に確定したものはな

い。それ故、多くの授業者や学習者から「難しい」「分からない」作品だとされてきたのが実情である。有名な実践としては、白石範孝の『白石範孝集大成の授業「やまなし」全時間・全板書』（東洋館出版二〇一六）などがある。また『やまなし』の「わからなさ」を軸に討議を展開したものに『國文學解釈と教材の研究』（一九八六・五）の「〈共同討議〉賢治童話を読む」がある。

注3　『論究日本文学』18号一九六二・六。この中で、文学活動期を四期に分け、この頃は「(3)　大正十年九月―十四年」の三期、「帰宅後、生地花巻の農学校に奉職。」の時代とし、農学校の生徒らを想定して精力的に創作活動を行っている、時代としている。

注4　黎明書房二〇〇七。

注5　『國文学解釈と教材の研究』一九八二・二。

注6　『賢治学』第7輯二〇二〇。

注7　『海保大研究報告』65巻1号1二〇二〇・一二。

注8　「沢蟹が泡をふくのは、陸に上がってえらの水分を保つために粘性の泡を出して呼吸をしている姿であり、水中では泡は吐かないということになる。」（注6田中論文）。

注9　『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』15巻一九八一。

（廿日市市立廿日市中学校教諭）